



# 自己関連 encoding に及ぼす

## 自己意識の影響

井 上 徹

心理学では、かつての理論的成果を認知論的立場から捉え直そうとする動きがめざましい。Higgins & Bargh (1987) はこれを「以前に“熱い”動機づけ用語で解釈された様々な社会現象は、いま比較的“冷たい”認知的用語で再解釈されている。」と表現している。

自己に関する研究も同様であった。Markus (1977) と Rogers (1977) の研究が転機となり、自己に対して認知論的立場からの再検討がなされるようになってきた。最近では、自己が情報を処理する上で、認知的スキーマ (Markus, 1977)、もしくはプロトタイプ (Kihlstrom & Cantor, 1984) として働くという考え方に焦点が当てられている。自己が、スキーマもしくはプロトタイプとして存在しているという仮説を検証するために、研究者たちは、認知心理学者たちが開発した実験的方法を用いている。

Rogers (1977) は、 Craik & Tulving (1975) の方法を用いて、セットになった特性形容詞を評定させ、評定作業がすべて終わった後、評定した形容詞を思い出させた。ここでは、4つのタイプの評定がなされた。

structurally (長い単語ですかそれとも短い単語ですか)

phonemically (XXX という単語と、韻を踏んでいますか)

semantically (YYY という単語と、同義語ですかそれとも関係ないですか)

self-referentially (あなたを描いていますか、あなたに当てはまりますか)

第一の実験で Rogers (1977) は、Craig & Tulving (1975) の結果を追認している。すなわち、被験者は、structural や phonemic な判断をした単語よりも、semantic な判断をした単語の方をより多く想起 (recall) した。しかし self-reference な判断をした単語は、semantic な判断をした単語よりもさらに多く想起されたのである。それぞれの特性語を評定することによって、被験者は、記憶領域のなかにその単語を取り込んでいるが、この取り込みを encoding という (定まった訳がないため、ここではそのまま encoding として使用する)。この結果について彼らは、「自己関連的な情報がより多く思い出されるのは、自己知識 (この schematic な特質は強い記憶形跡 (trace) を生じる) に関係づけて処理されるためである」としている。そして自己を、それ自体ユニークな認知体系であると定義している。

Rogers (1977) が見出した結果は、多くの研究において何度も繰り返し観察された (Kuiper & Rogers, 1979; Kendzierski, 1980; Klein & Kihlstrom, 1986)。こうした研究の結果は、明らかに「自己関連」的作業 (自己に結び付けて判断すること) が、入力において記憶に有意な効果を持っていることを証明している。すなわち、“自己関連”現象が存在していると考えることができる。

数多くの研究が自己関連効果の信頼性と妥当性を確立している一方で、何がその自己関連効果をもたらししているか、その様々な条件を探ろうとする研究は少ない。Hull & Levy (1979) は、self-awareness の状態もしくは、自己を意識している状態が、自己関連に従った情報の encoding 過程に関連していると考え実験を行っている。

この見解によれば、気質的に高い自己意識を持った個人は、低い自己意識を持った個人と異なっている。すなわち、情報を自己関連的に encoding する根強い傾向がある。同様に、self-awareness 的な行為の状況的な操作は、自己関連過程の下地を作る手がかりとして働く、というものである。

Duval & Wicklund (1972) は自意識 (self-awareness) を、“自分自身に対して注意が向かっている状態”と定義した。さらに自意識は、個人の行動を

次のような形でコントロールすると述べている。まず自己に注意が向かうことによって、現実の自己が“かくありたい自己像”と比較されその間のギャップが強く意識される。その結果、一時的に自己評価が低下し不快感が生ずるが、これを低減するために現実の自己を“かくありたい自己像”に同調させるよう行動が動機づけられる。彼らは、自意識を、自己への関心が活性化した結果として捉えている。Hull & Levy (1979) は、Duval & Wicklund (1972) が提案したこの自意識 (self-awareness) の考え方を、自己関連 encoding の観点から捉えなおしたのである。

Hull & Levy (1979) は、この自意識を人の持つ認知体系の特徴に起因していると考えている。すなわち、人は、周囲の環境からの情報を体系化する際に、特に自己に関連する情報により敏感に反応している。従って、自意識は、自分に対して注意を向ける傾向ではなく、自分との関連の中で情報を処理する傾向を示している、というのである。

彼らは、この考え方を検証するため、Fenigstein, Scheier & Buss (1975) の自意識調査項目のなかの私的自意識得点によって、被験者を高自意識群と低自意識群に分け、Rogers (1977) の手法に基づいて、それぞれの群の特性語の想起の特徴を調べている。その結果予想通り、高い自意識の被験者は、自己関連的に encoding した単語の想起数と、そうでない単語の想起数の間に明確な違いを見せた。一方低い自意識の被験者は、それほどの違いを見せなかったのである。

Fenigstein, Scheier & Buss (1975) は、性格特性として自意識 (self-awareness) を捉え、自分自身に注意を向けやすく、自己を意識しやすい性格特性を自意識特性 (self-consciousness) と名付けた。さらに彼らは、自意識特性を3つの下位特性に分けた。私的自意識、公的自意識、社会的不安である。私的自意識 (private self-consciousness) は、自己の内面や感情、気分など、他者からは直接観察されない自己の側面に注意を向けるものである。また公的自意識 (public self-consciousness) は、自己の服装や服装、あるいは他者に対する言動など、他者が観察しうる自己の側面に注意向けるものである。さらに社会

的不安は、他者との相互作用において精神的動揺を覚え易い性質とされた。なお彼らの研究に基づいて、菅原（1984）は、日本語版自意識尺度を作成している。

Hull & Levy（1979）と同様、Agatstein & Buchanan（1984）は、Rogers et al.（1977）の手法を用いて、自己意識と自己関連情報についての研究を行った。その結果、高い私的自己意識を持つ人は、私的自己についての自己関連情報により大きな記憶を持っている。また高い公的自己意識を持つ人は、公的な自己についての自己関連情報により大きな記憶を持っている。と報告している。

同様に Turner（1980）は、高い自己意識の人は、低い人より、自己関連特性語により大きな記憶を持っていることを報告している。

本研究は、認知論的な立場に立って、Hull & Levy（1979）の研究の第1実験に従って、自意識が自己関連 encoding に与える影響を探ろうとするものである。人は、自分との関連のなかで情報を処理する場合、そうでないときよりも情報を体系化しやすく、従って、後の場面でよりその情報を想起しやすい。この傾向は、特に高い自意識を持つ人に顕著であろうと考えられる。

## [方 法]

被 験 者 女子大学生75名

実験実施 1988年10月25日から11月10日

### 実験の概要

被験者は、自意識質問紙記入後、encoding と記憶再生の実験を行う。実験については、Hull & Levy（1979）の通り、刺激語判断には3つの次元を用いた（長さ、意味、自己関連）。刺激語の自由再生数を従属変数とした。

### 自意識調査票

Fenigstein, Scheire, & Buss（1975）の研究に基づいて、菅原（1984）が翻訳作成した自意識質問項目21項目を用いた（TABLE 2 参照）。公的自意識に関する項目11項目、私的自意識に関する項目10項目からなっており、それぞ

れ「非常に当てはまる(5)」から「全く当てはまらない(1)」まで、5段階のリッカートタイプの線分尺度が用意されている。

### encoding 用形容詞

青木(1974)の用いた性格表現用語から30語の形容詞を選択した。選択の基準は、青木(1974)が分類した14のカテゴリーを用い、各カテゴリーから2、3語ずつ選り出した。

TABLE 1 Traits List

1. 礼儀正しい	16. 口数の多い
2. 飾りのない	17. くどい
3. おとなしい	18. 怒りっぽい
4. 慎重深い	19. 考えを変えない
5. 明るい	20. 気づかいが多い
6. 人づきあいのよい	21. 気が強い
7. 優しい	22. むごい
8. あたたかい	23. 情け容赦のない
9. 失敗を責めない	24. 根気のない
10. つよい	25. あきっぽい
11. 行動範囲が広い	26. 気の多い
12. 用心深い	27. そそっかしい
13. 負けず嫌い	28. 融通のきかない
14. すばしっこい	29. 頭の悪い
15. 頭の回転が早い	30. 気が弱い

### 形容詞評価尺度

被験者が、形容詞を判断する際の処理の深さを変えるため、Rogers et al. (1977)の研究等を参考にして、3種類の形容詞評定尺度を用意した。

- 今の形容詞の文字数は多いですか (以下、length と略す)。
- 今の形容詞はいい意味で使われていますか (meaning)。
- 今の形容詞はあなた自身に当てはまりますか (self)。

文字数による処理水準が最も浅く、自分に関連づけた処理水準が最も深いと考えられる。

それぞれ、「はい」「いいえ」の2つの選択肢が用意されている。

被験者は、それぞれの形容詞を、3つの評定尺度のうちのどれか1つによって評価した。

## 手 続 き

被験者は、2名から12名の小集団で、大学の普通教室において行われた実験に参加した。あいさつの後、被験者は、2枚からなる調査用紙を手渡された。被験者は、まず1枚目の調査用紙（自意識に関する質問紙）に記入を求められた。被験者が記入した後、実験者は次のような指示を行った。

「これから私が、形容詞を1個ずついいます。このそれぞれの形容詞を用紙の項目に基づいて判断して下さい。私が番号を言いますので、皆さんはその番号の項目をまず読んで下さい。その後私が1つだけ形容詞を言います。形容詞がその項目に当てはまるかどうかをチェックして下さい。つまり、その形容詞が当てはまるのなら右の欄へ、当てはまらないのなら左の欄へチェックして下さい。判断に迷う場合でも必ずどちらかにチェックして下さい。」

指示の後、被験者は、番号—5秒待つ—形容詞—18秒待つ—次の番号、のサイクルで、30語の形容詞について評定を行った。なお番号と形容詞は、あらかじめテープに録音されており、テープレコーダによって流された。テープは、形容詞の出現順序を変えて2種類用意され、2本のテープの使用頻度ができるだけ等しくなるように用いられた。

形容詞の評定作業の後、被験者は、調査用紙を裏返すよう言われ、3分間の間に先ほど出てきた形容詞を、できるだけ多く思い出して記入するよう求められた。この形容詞の再生個数が、従属変数となる。

## 【結 果】

調査・実験結果の集計と分析は、大阪大学大型計算機センターの ACOS-6・SPSS 統計パッケージと、大谷女子大学井上研究室のパソコン NEC PC

9801 VM によって行った。

# 1. 自意識尺度

因子分析と項目分析により、自意識尺度項目の検討を行った。

## 1. 因子分析

被験者の各項目に対する評定を、主因子法による因子分析にかけた。

第Ⅰ因子（寄与率 27.83%）に対する負荷量を見ると、項目 2、3、7 につ

TABLE 2 FACTOR LOADINGS OF EACH ITEM

No.	item	factor 1
1	自分が他人にどう思われているのか気になる。(*)	0.376
2	世間体など気にならない。(*)	-0.006
3	自分がどんな人間か自覚しようと努めている。	-0.385
4	人に会う時、どんな風にふるまえば良いのか気になる。(*)	0.427
5	その時々の方持ちの動きを自分自身でつかんでいたい。	0.518
6	自分の発言を他人がどう受け取ったか気になる。(*)	0.599
7	自分自身の内面のことには、あまり関心がない。	-0.366
8	人に見られているとつかうをつけてしまう。(*)	0.411
9	自分の容姿を気にするほうだ。(*)	0.509
10	自分が本当は何をしたいのか考えながら行動する。	0.380
11	ふと一歩離れたところから自分をながめてみることもある。	0.391
12	自分についてのうわさに関心がある。(*)	0.733
13	人前で何かするとき、自分のしぐさや姿が気になる。(*)	0.675
14	自分を反省してることが多い。	0.535
15	他人を見るように自分をながめてみることもある。	0.462
16	しばしば自分の心を理解しようとする。	0.692
17	他人からの批評を考えながら行動する。(*)	0.611
18	つねに、自分自身を見つめる目を忘れないようにしている。	0.532
19	初対面の人に、自分の印象を悪くしないように気づかう。(*)	0.742
20	気分が変わると自分自身でそれを敏感に感じ取るほうだ。	0.418
21	人の目に映る自分の姿に心を配る。(*)	0.730

(\*) 公的自意識項目



いて負荷量がマイナスとなった。この3項目は、他の項目と違って、逆転項目（逆に得点化する必要がある項目）であることが分かる。

また項目2については、この第1因子の因子負荷量が他の項目に比べて非常に小さく、共通の因子を持っていないといえる、すなわち自意識尺度としては、不適切であると考えられる。

## 2. 項目分析

次に全21項目について、G-P 分析による項目分析を行った。分析の過程は以下の通りである。

まず項目2、3、7の得点を逆転させ、各被験者の総合点により被験者を順位づけた。

高・低得点者各20名を選び（同点者がいる場合は、ランダムに抽出した）、Hi 群・Lo 群とした。

各項目について、Hi・Lo 群間の平均値の差を検定した。なお分散に差のある項目については、肥田野・瀬谷・大川（1961, p63）の方法によって、 $t$  値ならびに自由度を求めた。

結果は、下記の表のとおりであり、項目2についてのみ上位群・下位群間に差がみられなかった。ここでも、項目2については、自意識尺度項目として疑問が残る結果となった。

## 3. 信頼性係数と自意識項目の決定

肥田野・瀬谷・大川（1961, p. 180）のクーダー・リチャードソンの公式によって信頼性係数を求めた。

オリジナルな全21項目の信頼性係数は、 $\alpha=0.8498$ であった。次に、因子分析・項目分析によって不適切ではないかと考えられた項目2を除く、20項目について信頼性係数を求めた。 $\alpha=0.8622$ であった。項目2を除くほうが信頼性係数が上がることがわかる。

因子分析、項目分析の結果さらにこの信頼性係数の結果から、項目2は、他の項目に比べ自意識尺度項目としてふさわしくないと判断し、以下の分析から除くこととした。

TABLE 3 G-P ANALYSIS

item	Hi Group		Lo Group		F	t
	mean	sd	mean	sd		
1	4.35	0.909	3.65	0.792	1.317	2.531 *
2	2.55	1.243	2.45	0.804	2.390 *	0.294
3	4.45	0.739	3.65	0.792	1.149	3.219 **
4	4.55	0.497	3.35	1.792	2.539 *	5.594 **
5	4.45	0.497	3.30	1.004	4.081 **	4.474 **
6	4.65	0.572	3.10	0.888	2.410 *	6.396 **
7	4.50	0.500	3.85	1.061	4.503 **	2.416 *
8	3.75	0.993	2.85	1.061	1.142	2.700 *
9	3.95	0.739	3.10	0.888	1.444	3.210 **
10	3.85	0.852	3.05	0.973	1.304	2.696 *
11	4.00	0.836	3.10	1.220	2.130	2.653 *
12	4.70	0.458	3.10	1.044	5.196 **	6.118 **
13	4.50	0.500	3.20	1.029	4.235 **	4.953 **
14	4.30	0.781	3.15	1.061	1.846	3.805 **
15	3.85	0.852	2.50	0.974	1.307	4.547 **
16	4.25	0.622	2.60	0.916	2.169 *	6.496 **
17	4.00	0.632	2.55	0.973	2.370 *	5.448 **
18	4.05	0.920	2.95	1.071	1.355	3.396 **
19	4.70	0.458	3.10	0.913	4.239 **	6.653 **
20	4.35	0.572	3.40	1.157	4.091 **	3.208 **
21	4.25	0.536	2.85	0.852	2.257 *	6.063 **

each group N=20

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$

## 2. 自意識得点に基づく Hi-Lo 群間の比較

それぞれの自意識得点に基づいて、Hi-Lo 群各15名を取り出し、encoding 3 条件における 特性形容詞の想起再生数を調べ、Keppel (1973) によって、 $A \times (B \times S)$  の repeated measure の二要因分散分析を行った。

### 1. 私的自意識得点

まず、私的自意識得点によって Hi-Lo 群を取り出し比較した。特性形容詞の平均再生数と分散分析の結果は、TABLE 3 と TABLE 4 の通りである。私的自意識 Lo 群は、encoding 条件が length meaning self と変わると平均値が上がっている。Hi 群については、meaning 条件で平均値がやや高くなるものの、ほぼ同様の傾向を示している。分散分析の結果は、encoding の条件による主効果 ( $F=4.073$ ,  $df=2, 56$ ,  $p<.05$ ) にのみ有意がみられた。私的自意識の高低に係わらず、encoding の条件で、再生数に差があることが分かる。そこで、Hi Lo 両群を合わせてそれぞれの条件間で、対応

TABLE 4 MEAN RECALL of Private SC group

	length	meaning	self
Lo	1.467	1.733	2.800
Hi	1.933	2.467	2.400

( $n=15$  in each group)

TABLE 5 ANOVA of RECALLS

	df	MS	F	P
A	1	1.60001	1.19573	ns
S/A	28	1.33809		
B	2	6.09999	4.07312	*
A*B	2	2.63333	1.75834	ns
B*S/A	56	1.49762		

のある t-test を試みた。length-meaning ( $t=1.717$ ,  $df=29$ , ns)、length-self ( $t=2.358$ ,  $p<.05$ )、meaning-self ( $t=1.525$ , ns) という結果であった。言葉の長さを評価することによる encoding よりも、自己関連 encoding の方が、有意に再生数が多いという結果であった。

## 2. 公的自意識得点

次に公的自意識得点により、Hi Lo 各15名を取り出し分析した。平均値を見ると、Hi Lo 群でやや異なる再生傾向がみられるようであるが、分散分析の結果は、交互作用 ( $F=2.269$ ,  $df=2$ , 56, ns) を見せていない。ここでも公的自意識得点の Hi Lo に係わらず、そこで私的自意識と同様に、Hi Lo 2 群を合わせて、対応のある t-test をそれぞれの条件間で行った。length-meaning ( $t=0.519$ ,  $df=29$ , ns) length-self ( $t=2.625$ ,  $p<.05$ ) meaning-self ( $t=2.217$ ,  $p<.05$ ) であった。この結果を見ると、length meaning よりも自己関連 encoding の方が、再生量が多かった。

TABLE 6 MEAN RECALL of Public SC Group

	length	meaning	self
Lo	1.267	1.733	0.667
Hi	2.200	2.002	2.400

TABLE 7 ANOVA of RECALLS

	df	MS	F	P
A	1	2.1778	1.21202	ns
S/A	28	1.79682		
B	2	5.51112	4.61396	*
A*B	2	2.71109	2.26975	ns
B*S/A	56	1.19444		

## 3. 総合自意識得点

自己意識項目として用意した全20項目の得点によって、Hi Lo 2 群各15名を選び出して分析にかけた。分散分析の結果は、encoding 条件の主効果のみが有意であった ( $F=3.824$ ,  $df=2$ ,  $56$ ,  $p<.05$ )。ここでも先ほどの私的自意識、公的自意識の結果と同様、自意識の Hi Lo に係わらず、encoding の条件にのみ差があることが見出された。Hi Lo 群を合わせて、対応のある t-test を行った。結果は、length-meaning ( $t=0.451$ ,  $df=29$ , ns)、length-self ( $t=1.98$ ,  $p<.10$ )、meaning-self ( $t=2.392$ ,  $p<.05$ ) であった。ここからも、他の条件に比べて、自己関連 encoding 条件の再生量が有意に多いことが分かる。

TABLE 8 MEAN RECALL of General SC Group

	length	meaning	self
Lo	1.667	1.667	2.533
Hi	2.267	2.067	2.733

TABLE 9 ANOVA of RECALLS

	df	MS	F	P
A	1	3.60001	1.77188	ns
S/A	28	2.03175		
B	2	5.21112	3.82412	*
A*B	2	0.29999	0.22014	ns
B*S/A	56	1.3627		

### 3. 因子得点に基づく Hi Lo 群間の比較

自己意識項目への評定を因子分析にかけ、varimax 回転後の各自の因子得点の高低から、被験者を Hi Lo 群に分けた。

#### 1. 第 I 因子

TABLE 9 に見られるように、第 I 因子は、他者に自分がよい印象を与えているかどうかを気遣う点に特徴を持っている。そこでこの因子を、「他者に与える良き印象への自己意識」と名付けた。この第 I 因子因子得点によって、被験者を Hi Lo 2 群に各15名づつふりわけた。それによって、再生数の分散分析を行ったところ、encoding の要因による主効果がはっきりとみられた ( $F=7.92827$ ,  $df=2, 56$ ,  $p<.01$ )。平均再生数を見ると、encoding 条件間に差がみられることが分かる。さらにこれを、対応のある t-test にかけてみた。length-meaning ( $t=2.445$ ,  $df=29$ ,  $p<.05$ )、length-self ( $t=3.580$ ,

TABLE 10

第 I 因子	他者に与える良き印象への自己意識	因子負荷量
18	初対面の人に、自分の印象を悪くしないように気づかう。	0.822
20	人の目に映る自分の姿に心を配る。	0.789
11	自分についてのうわさに関心がある。	0.661
16	他人からの批評を考えながら行動する。	0.632
12	人前で他かするとき、自分のしぐさや姿が気になる。	0.622

TABLE 11 MEAN RECALL of F1 SC Group

	length	meaning	self
Lo	1.333	1.933	2.867
Hi	1.867	2.600	3.000

TABLE 12 ANOVA of RECALLS

	df	MS	F	P
A	1	4.44446	1.61298	ns
S/A	28	2.75556		
B	2	13.3333	7.92827	**
A*B	2	.577759	.343547	ns
B*S/A	56	1.68175		

$p < .01$ )、meaning-self ( $t = 1.959$ ,  $p < .10$ )、確かに3条件によって違いがある。

## 2. 第Ⅱ因子

第Ⅱ因子は、外から距離をおいて自分を見つめようとする傾向を示している。「客観的対象としての自己への注目」の因子と名付けた。他の結果と異なり、分散分析の結果は、全ての主効果、交互作用について有意ではなかった。自己を客観的に見つめることは、自己関連 encoding に対して、何の効果ももたらさないといえる。

TABLE 13

第Ⅱ因子 客観的対象としての自己への注目		因子負荷量
10	ふと一步離れたところから自分をながめてみることがある。	0.778
17	つねに、自分自身を見つめる目を忘れないようにしている。	0.718
14	他人を見るように自分をながめてみることがある。	0.697
2	自分がどんな人間か自覚しようと努めている。	0.663
9	自分が本当は何をしたいのか考えながら行動する。	0.631

TABLE 14 MEAN RECALL of F2 SC Group

	length	meaning	self
Lo	1.400	2.067	2.333
Hi	2.067	1.933	2.133

TABLE 15 ANOVA of RECALLS

	df	MS	F	P
A	1	.277771	.168915	ns
S/A	28	1.64445		
B	2	1.87778	1.47231	ns
A*B	2	1.74445	1.36777	ns
B*S/A	56	1.2754		

## 3. 第Ⅲ因子

第Ⅲ因子は、人から見られた自分を気にしたり、自分の気持ちが動くことに不安を持ち、はっきり気持ちをつかんでいたいといった項目に因子負荷量が高く、「他者に認知された自己への不安」と名付けた。分散分析の結果は、encoding 要因にのみ有意な主効果がみられた。encoding の3条件について、対応のある t-test を行った。length-meaning ( $t=1.676$ ,  $df=29$ , ns)、length-self ( $t=2.567$ ,  $p<.05$ ) meaning-self ( $t=1.179$ , ns)、であった。単語の長さによる encoding と、自己関連 encoding の間に有意な差がみられる。

TABLE 16

第Ⅲ因子 他者に認知された自己への不安	因子負荷量
3 人に会う時、どんな風にふるまえば良いのか気になる。	0.754
5 自分の発言を他人がどう受け取ったか気になる。	0.727
4 その時々の気持ちの動きを自分自身でつかんでいたい。	0.596
1 自分が他人にどう思われているのか気になる。	0.506

TABLE 17 MEAN RECALL of F3 SC Group

	length	meaning	self
Lo	1.467	2.000	2.733
Hi	2.133	2.600	2.867

TABLE 18 ANOVA of RECALLS

	df	MS	F	P
A	1	4.89999	1.62047	ns
S/A	28	3.02381		
B	2	7.50000	3.78151	*
A*B	2	.633331	.319327	ns
B*S/A	56	1.98333		



## 4. 第Ⅳ因子

第Ⅳ因子は、自分自身の気持ちや、人からみられる自分に敏感な傾向を示している。そこで、「自己に係わる感受性」と名付けた。この因子の因子得点 Hi Lo 群についても、他の因子得点群同様、主効果や交互作用はみられなかった。encoding 要因の主効果 ( $F=5.906$ ,  $df=2, 56$ ,  $p<.05$ ) がみられたのみであった。各条件間の平均値について、対応のある  $t$ -test を試みると、length-meaning ( $t=2.931$ ,  $df=29$ ,  $t<.05$ )、lengthself ( $t=2.922$ ,  $p<.05$ )、meaning-self ( $t=0.839$ , ns) であった。意味判断、自己関連による encoding は、長さ判断による encoding よりも再生量が有意に多かった。

TABLE 19

第Ⅳ因子 自己に係わる感受性		
19	気分が変わると自分自身でそれを敏感に感じ取るほうだ。	0.676
8	自分の容姿を気にするほうだ。	0.661
7	人に見られているとついかわいそうをつけてしまう。	0.504

TABLE 20 MEAN RECALL of F4 SC Group

	length	meaning	self
Lo	1.807	2.333	2.533
Hi	1.267	2.333	2.667

TABLE 21 ANOVA of RECALLS

	df	MS	F	P
A	1	.400024	.202097	ns
S/A	28	1.97936		
B	2	9.24445	5.90669	**
A*B	2	.933319	.59634	ns
B*S/A	56	1.56508		

## [考 察]

自意識の高い被験者は、情報を自己との関連のなかで体系化する傾向にあるとの仮定に立って、自己関連 encoding を自意識との関係でみてきた。しかし菅原（1984）による私的自意識、公的自意識、総合自意識得点によって、被験者を Hi Lo 2 群に分け、自己関連 encoding の差をみたが、いずれも自意識に関連する主効果、交互作用は見出せなかった。encoding による主効果のみがみられた。また自意識得点を因子分析にかけ、各因子について、因子得点の Hi Lo 群と、自己関連 encoding との関連も見てみた。いずれも自意識得点の結果と同様、encoding 要因による主効果はみられたが、自意識の因子得点との関連は、見出せなかった。

自意識が、自己関連 encoding と関連を持たなかったことについてどの様に考えられるであろうか。

ひとつは、自己関連 encoding の効果が、自己それ自体との関係で、処理され入力された結果ではないかもしれないという解釈である。これについて Higgings & Bargh (1987) は、数多くの研究を挙げて、自己関連以外の、“自己関連”作業に結び付いた変数が、再生の促進効果をもたらししているのではないかと述べている。彼らが挙げている研究のひとつ、Ferguson et al. (1983) は、被験者が、特性形容詞を社会的望ましさに従って評定した場合、“自己関連”作業の場合と同様の記憶促進効果がみられと報告している。すなわち“自己関連”指向作業は、評価的判断を含んでおり、自己知識と関係づける入力の情報処理における効果について、はっきりした結論を引き出すことはできないとしている。

本研究でも、encoding 要因に主効果を見たものの、特性語の再生量からみると、「望ましいかどうか」の meaning 判断条件と、「自分に当てはまるかどうか」の self 判断条件の間に、差がみられないという結果が、私的自意識得点や第Ⅲ因子得点、第Ⅳ因子得点など多くの状況において見られた。この結果からすると、自己関連 encoding は、評価的 encoding と明確な区別をつ

けにくいものであるのかも知れない。

また Klein & Kihlstrom (1986) は、カテゴリー体系化から自己関連効果を解釈し、Wells et al (1984) は、encoding 時点ではなく検索時点における効果として、自己関連効果を考えている。これについては、encoding の材料を特性形容詞から、他の材料に変えることによって、確認することができるのではないと思われる。

自意識と、自己関連 encoding が結び付かなかった原因として、さらに自意識特性それ自体の内容が考えられる。すなわち、Fenigstein et al. (1975) は、自分自身に注意を向けやすく、自己を意識しやすい性格特性を自意識特性 (self-consciousness) と名付けているが、この定義の通り、本研究で測られた自意識は、あくまで注意を自己に向け易い傾向を示すもので、Hull & Levy (1979) の考えるような、自分との関連の中で情報を処理する傾向ではないのかもしれない。先に挙げたように、自意識と自己関連情報の処理については、いくつかの研究 (Agatstein & Buchanan, 1984; Turner, 1980) が、その関連性について言及している。しかし自己に向けられる意識と、自己の持つ情報処理体系化の間のメカニズムについては、十分に解明されているとはいいい難い。特に自己の認知的体系としての特徴を示す的確な測度が得られたならば、二者の関係はより明確になるのではなかろうか。

非常に消極的な結果であるが、本研究の第Ⅱ因子「客観的対象として自分の自己への注目」の因子得点による Hi Lo 群の分析から、自己の認知的な特徴を探ることができる。

第Ⅱ因子の因子得点の分析結果は、encoding 要因の主効果も見られないという結果であった。客観的に自己を見る傾向の Hi Lo 2 群を取り出すと、length meaning self の判断による encoding の効果が消えてしまったのである。平均値だけからみると、特に Hi 群の各 encoding 条件の再生数に差がほとんど見られず。これが自己関連 encoding の効果をなくした原因ではないかと推測される。すなわち、「自己を客観的にみる」特徴を持つ人は、単語の長さ判断や、意味判断と同様に、比較的浅い情報処理レベルで自己を判断

しているため、自己関連判断を行っても、特性形容詞の保持が困難であったのではないだろうか。統計的にみると明確ではないが、本研究で用いられた自意識項目の一部分に、情報処理的な見解からの自己の特徴が含まれていたと考えられるのである。

以上、自己意識と自己関連 encoding の関係を結果に即して述べてきた。本研究の結果、自己関連 encoding の効果は見られたものの、Hull & Levy (1979) が述べたような、自意識との関連は全く見られなかった。従って、自己の認知的特徴から、この効果を説明することはできなかった。しかし、自己のみならず、人の行動についての認知論的な解釈の研究は開始されてから日も浅く、様々な測度についても、本研究に用いられた自意識測度のように、従来の「動機論的」立場から作成されたものが使用されている。また実験の方法論についても、改良の余地が大きく残されているといえる。今後これらの点を考慮に入れて、より精緻な検討が必要であろう。

なお本実験にあたって、大谷女子大学卒業生高野智子さんの協力を得た。ここに謝意を表する。

#### [文 献]

- Agatstein, F. C., & Buchanan, D. B., 1984, Public and private self-consciousness and the recall of self-relevant information. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 10, 314-325.
- 青木孝悦, 1974, 個性表現辞典, ダイヤモンド社.
- Craik, F. I. M., & Tulving, E., 1975, Depth of processing and the retention of words in episodic memory. *Journal of Experimental Psychology: General* 104, 268-294.
- Duval, S., & Wicklund, R. A., 1972, *A theory of objective self awareness*. New York: Academic Press.
- Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A. H. 1975, Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 43, 522-527.
- Ferguson, [T. J., Rule, G. R., & Carlson, D., 1983, Memory for personally relevant information. *Journal of Personality & Social Psychology*, 44,

251-261.

Kendzierski, D., 1980, Self-schemata and scripts: The recall of self-referent and scriptal information. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 6, 23-29.

肥田野直 瀬谷正敏 大川信明, 1961, 心理教育統計学, 培風館.

Higgings, E. T., & Bargh, J. A., 1987, Social cognition and social perception. *Annual Review of Psychology*, 38, 369-425.

Hull, J. G., & Levy, A. S., 1979, The organizational functions of the self: An alternative to the Duval and Wicklund model of self-awareness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 756-768.

Keppel, G., 1973, *Design and Analysis: Researcher's Handbook*. Prentice Hall.

Klein, R. E., & Kihlstrom, J. F., 1986, Elaboration, organization and the self-reference effect in memory. *Journal of Experimental Psychology: General*, 115, 26-38.

Kuiper, N. A., & Rogers, T. B., 1979, Encoding of personal information: Self-other difference. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 499-514.

Rogers, T. B., 1977, Self-reference in memory: Recognition of personality items. *Journal of Research of Personality*, 11, 295-305.

菅原健介, 1984, 自意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み. 心理学研究, 57, 3, 184-188.

Turner, R. G. 1980. Self-consciousness and memory of trait terms. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 6, 273-277.

Wells, G. L., Hoffman, C., & Enzle, M. E., 1984, Self-versus other-referent processing at encoding and retrieval. *Personality & Social Psychology Bulletin*, 10, 574-584.

(1990.6.5 受理)

